

見入水たるか為め目
 小帰国の金小就くと
 依て兩三日中ハ当
 し土京及び東欧
 伊太利等ハ遊人
 も五月中旬まじハ尤
 船ハ上リ六月中ハ
 帰着致たまき豫
 後ハ漫遊中珍音
 を見聞致ハハ時々
 仕ハ草々不宣
 九日英京 行進
 隈先生侍申

謹啓五月二十日祭の尊厳
 拜誦仕ル陸奥公使ハ素
 直接ハ華盛市ハ被赴ル付
 顔以て京地の近情を承
 を得ず遺憾ニ奉存
 大ハゆ代ハ近日兩度まを舍
 合致少所至極好元氣ハ有之
 川者乍悼申休神
 大石氏ハ勲賞演説ハ賞共を志
 取る能ハも済しかどニ後目
 甚た評判よろしく之か為め
 三トフランス寄ク在留の日本人
 全体ハ敬重セリ、床どの次
 筆ハ決スル

当地の見聞ハ甚だ不充
 得共何分暑氣の強キハ困却
 致リ有来多廿七日祭ハ汽船
 ハ渡英可仕ル
 過日ハトヲドハ赴五ハウス氏
 面寄し頗る懇切なる待遇
 を受ル疾痾ハ依然たる様子
 亦水とも気分ハ変リホキマのと
 見ハ中々元氣ハ種々面白キ
 意見ハ述べられ大ハ益を得
 中ハ決テ序ハ有之ルを可然快
 礼ハ致ス草々拜具
 紐育府
 六月廿五日 行進
 大隈先生侍申

謹啓爾後頗と申多
 般快海客ラウハ小生儀
 英ハ小整居の覺悟あり
 希地ハ滞留此在リハ
 見物志キ事扱ハ無
 素癖ハ再祭昨今ハ
 事のみ致居候然し奉
 遠ハ何ハ蚊と身体を常
 扱多キカ為め運動
 爲めハヤ身体ハ極強
 之ハ者乍悼申休神
 相良大ハ片ハ君ハ無
 是日高柳陶造氏